

令和 4 年 6 月 8 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K10941

研究課題名(和文) 術語「budo」の示す意味内容・概念の研究：武道研究国際化における再定義と発信

研究課題名(英文) Study on the meanings and the concept of the technical term "budo": Redefinition and sharing in internationalization of budo research

研究代表者

長尾 進 (Nagao, Susumu)

明治大学・国際日本学部・専任教授

研究者番号：40207981

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：日本の現代武道は、hopology の「martial combative systems」と「civil combative systems」という区分法から見れば、「スポーツ・娯楽・精神修練などの機能をもつ civil combative systems の一つ」と定義づけることができた。また、武道の英訳である martial arts と martial ways にはそれぞれ一長一短があり、すでに Oxford English Dictionary に採録されている budo のままでの認知を促進することの方向性も確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでの海外武道研究者と日本の武道研究者との対話(国際シンポジウム等)では、日本の現代武道の定義が明確でないため、議論がかみ合わないことがしばしばあった。今回の研究で、hopology という研究領域からではあるが、現代武道を他の武術・格闘技との比較において定義づけることができ、議論の基盤を提供できたことは、武道研究の国際展開において意義あることであった。また、武道の英訳についても、martial arts や martial ways の妥当性を検証しつつ、すでに英語化されつつある budo での発信促進が確認されたことも意義あることであった。

研究成果の概要(英文)：Modern Japanese budo could be defined as 'one of the civil combative systems with functions such as sport, recreation and spiritual training' in terms of hopology's distinction between 'martial combative systems' and 'civil combative systems.' It was also confirmed that the English expressions martial arts and martial ways have their own merits and demerits, and that there is a direction to aim for the establishment of the term budo, which has already been included in the Oxford English Dictionary.

研究分野：身体教育学 武道論

キーワード：budo martial arts martial ways Draeger combative systems educational

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

「武道」は、国際的武道研究の場面では「budo」として一般名詞的に使用されつつあるが、日本と海外との研究者・研究団体間で、budoの示す意味内容(概念・定義)・特長・範囲などについて、かならずしも共通の認識を得ているわけではない。このことが、budo(武道)の国際シンポジウムの場面においても、議論が噛み合わないことの一因となっていた。budo(武道)は戦闘での武技にルーツをもちつつも、日本では中世以降長い年月をかけて、そこに深い精神性や人間形成的・教育的意義、及び自衛・平和志向などの特長をはぐくんできた。しかし近年、海外のbudo研究者・研究団体のなかには、budoの特長を共有しない攻撃性・残酷性を有する柔術・打撃系総合格闘技等を martial arts や budo として研究の対象とし、また budo よりも martial arts を上位の概念として位置づける傾向も出てきていた。budo 研究におけるこうした国際的な傾向は、これまでの日本における武道研究が大事にしてきた人間形成や教育的意義の側面を二次的・軽微的なものにしてしまうのではないかという危惧もあり、海外の研究者や研究団体も巻き込んだ“budo”についての「改めての意味内容の確認(再定義)」と、その発信と共有が急務となっていた。

### 2. 研究の目的

そこで本研究では、“budo”について学術的厳密さをもってその意味内容を考察・分析した故 Donn.F.Draeger の定義を手掛かりとして budo の再定義を行い、かつその成果を発信し、budo 研究の国際的場面(国際シンポジウム等)における議論の基盤を提供することを目的とした。

### 3. 研究の方法

本研究開始前までに予備的研究として Draeger の代表的著作(3部作)を分析し、Draeger は「budo(武道)は戦場での格闘技術である bujutsu(武術)から生まれたものであるが、あくまで自衛の手段としてのものであり、可能であればその行使をしないことを理想とするもの(自衛・平和志向)」として budo を定義づけていたこと。また、「単なる格闘技術の習得にとどまらず、そのなかに精神的深遠さを求めるものであることも budo の要素であるとし、budo 以前の bujutsu についての英語での説明には martial arts を用い、一方で budo には“martial ways”を用いて、明確な差別化を図った」ことなどを明らかにしていた。

そこで本研究では最初に、Draeger が定義した上記の budo の定義に加え、他の側面からの定義をしていなかったかについて、1960年代から70年代にかけて Draeger とともに日本の武術・武道を継続的に修行し、かつ日本の武術・武道および東南アジアの武術について共同研究を行った Phillip ReInick、Liam Keeley、Hunter B. Armstrong の3氏を招いての国際フォーラムを2019年3月に開催し、日本側の武道研究者である酒井利信氏(筑波大学)、アレキサンダー・ベネット氏(関西大学)との対話を通じて、その内容を明らかにした。さらに、それを分析・整理したうえで、日本武道学会第52回大会(2019年9月)において発表した。

また、同フォーラムにおいて Draeger が用いた martial ways という表現・概念については、日本の武道研究のなかではいまだ本格的議論がなされていないことが明らかになったため、「武道の英訳 martial ways をめぐっての対話」と題するフォーラムを2021年3月に開催し、英語文献学研究者である石黒太郎氏(明治大学)と前出ベネット氏のプレゼンテーションをもとに、武道研究者との対話を行い、さらに分析・整理したうえで、その内容について日本武道学会第54

回大会（2021年9月）において発表した。

#### 4. 研究成果

2019年3月に開催したフォーラムにおけるパネリストのプレゼンテーションおよび武道研究者との対話から、Draegerのbudoについての他の側面からの定義が明らかになった。Draegerたちが中心になって創始したhopology（武器学・戦闘学）の区分法に世界の多くの武術・格闘技を、「martial combative systems」（軍事武術）と「civil combative systems」（民間武術）とに分ける区分法があり、この区分法に基づいて日本の現代武道（柔道、剣道、弓道、空手道等）を見るならば、「スポーツ・娯楽・精神修練などの機能をもつcivil combative systems」と定義されていた。ややもすると日本の武道研究者は、日本の武道がもつ教育的・人間形成的側面等から武道を単なる格闘技よりも上位に位置づけようとする傾向がある。しかしながら、hopologyのような研究領域の視点からみれば、日本の武道は「civil combative systems」（民間武術）の一形態とみなされていることを、まず認識したほうが良いであろう。

そのうえで、2021年3月に開催したフォーラムにおいて、パネリストおよび武道研究者たちとの対話から、Draegerが武道に対して用いたmartial waysという表現・概念の妥当性について検討を加えた。

- 1) martial arts そのものが日本語「武芸」の英訳語であり、ヨーロッパにおいては日本および東洋の武術・武道を表すものとして「翻訳借用」され、そのまま定着した。
- 2) Draegerは日本人にとっての「道」を、「自己修養の手段としての旅であり、最終的には自己完成につながるもの」と認識していた。また、「道」の名人は、単なる肉体的な運動の域を超えている技術者である。その人の本質は精神的なものであり、自己完結が特徴である。名人は自分自身に大きな要求をし続けて、日々のトレーニングをしており、終わりが無い」と述べている。日本に住み着いて天真正伝香取神道流をはじめ古武術・現代武道に真摯に取り組み、また各武術相伝者たちの修行・生活態度に身近に接したDraegerにとっては、そうした人々の修行・生活態度が単にmartial artsという言葉で呼ばれることは「人々の不注意」であると、その代わりとしてmartial waysを彼は用いた。
- 3) 決まりだとかことわり、教えといった、漢和辞典に出てくるような字義での「道」に当たる英語は、way、path、road、track、courseなどがあげられるが、それぞれの語源から考えても、「人が歩く道であり、単に歩くだけではなく、重い荷物を苦勞して運ぶ道」というようなニュアンスも持っていたwayは、武道の道（どう）の訳語として適当と思われる。
- 4) ただし、wayはキリスト教の用語としても使われる。とくにthe Wayという用法は「神」を連想させることになり、その意味においてwayは無色ではない。またこの用法においては複数形waysは使わないので、waysという複数形から武道のもつ精神や心に結びつく連想は容易ではない。
- 5) 日本人には、artsに美術が含まれることからくる限定的なとらえ方がある。美術に限らず（自然に対しての）人間の営み全てがartsであるので、liberal artsという用法もあり、そこからcultivationなど「人間が鍛錬・訓練して身につけるもの」という連想も生まれる。また英語のネイティブ・スピーカーの感覚としては、artがwayよりも下位という認識はあまりない。これらから考えればmartial artsも武道の訳語として適さないことはないが、前記したようにmartial artsという表現ではとらえきれないところを、Draegerはmartial waysという言葉で表そうとした。
- 6) Draegerが創出した学問分野であるhopology（武器学・戦闘学）におけるmartial combative

systems と civil combative systems という区分法があるが、江戸時代の武士全てが martial combative systems に組み込まれているとは言い切れず、martial (軍事) と civil (民間) の間に位置する概念や区分もありうるのではないかという問題提起がなされた。これに対して、たとえば education (教育) や educational は、「(語源的にも) 人間の中から鍛錬によっていいものを導き出していく」という意味合いがあり、これなどは martial と civil の間に位置する概念・区分になりうると思われる。

- 7) martial arts という成句が内外においてこれだけ浸透しているなかにおいて、martial ways がそれにとって代わることは容易ではない。これに対して budo は、英語文献での初出例は 1905 年であり、2004 年には『オックスフォード英語辞典 (OED)』に項目として加えられている。また、「武士道」(bushido) という言葉が新渡戸稲造の著作の影響などから国際用語になっていることなどからも、武道は budo として理解してもらえるようにしていくことが、望ましい方向性といえる。martial ways を用いた Draeger も、著作においては道を *do*、術を *jutsu* としてそのまま使っている部分も多い。
- 8) ただし、budo は英語圏には一定程度浸透しているが、フランス語圏においてはあまり普及していない。英語圏以外への budo の普及・浸透は課題としてある。
- 9) 武道を紹介するときに、(Japanese) martial arts, martial ways, budo のどれが良いかについては、相手の武道に対する理解度にもよる。武道を全く知らない海外の人相手に説明する場合には、(Japanese) martial arts が理解してもらいやすいし、そのように説明しても問題はない。

最後に本研究の結論として、以下の 2 点を掲げる。

- ・日本の現代武道はそのまま戦闘武術として応用できうる側面もあるが、他の武術・格闘技との比較においては、あくまで「スポーツ・娯楽・精神修練などの機能をもつ“民間”の格闘形態」であることの認識の必要性。
- ・そのうえで、日本の武道のもつ教育的・人間形成的特長は、既存の英語表現では表現しきれない部分があり、すでに英語化されつつある budo のままでの発信・周知の方が良い可能性がある。

以上

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 長尾進
2. 発表標題 術語budo, bujutsu, bugeiの意味内容に関する研究：ドン・F・ドレガーの事蹟と、ホプロロジーをてがかりとして
3. 学会等名 日本武道学会第52回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 長尾進
2. 発表標題 「武道」の英訳をめぐる諸課題について
3. 学会等名 日本武道学会第54回大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 長尾進	4. 発行年 2020年
2. 出版社 自刊	5. 総ページ数 57
3. 書名 術語budoの示す意味内容・概念の研究：武道研究国際化における再定義と発信（中間報告書）	

1. 著者名 長尾進	4. 発行年 2021年
2. 出版社 自刊	5. 総ページ数 27
3. 書名 「武道」の英訳 “martial ways ” をめぐっての対話	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 「術語 “budo” “bujutsu” について考える - Donn. F. Draeger の著述・修行を手がかりとして -」	開催年 2019年～2019年
---	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------